

【祇園会】

祇園会の山路に入るや大津籠
京を下に見るや祇園のゑひもせず
祇園会のけふによき名や心太
祇園会や神のまにまに手向山
祇園会や神代も聞かず今の京
祇園会や京は日傘の下を行く
祇園会や人をもる燈の薄ごろも
祇園会やこれほどの人むさからず
祇園会や真葛が原の風かほる
祇園会や僧の訪ひよる梶が許
祇園会や空もかざりて雲の峰
祇園会やつかふ扇も山おろし
祇園会や似げなき児の花紅葉
祇園会や人の人中月出づる
祇園会やまことの山はかんこどり
祇園会やとほ濁りせる京の空
祇園会の人の中にあて人恋し
祇園会の団扇を持ちてすたすと
祇園会の団扇もろうてまた歩く

宗因
同
道彦
如貞
吐月
蓼太
同
鶴英
蕪村
同
六柿
洗市
北橘
一草
如本
飴山實
武藤紀子
近藤沙羅
小川もも子

祇園会や我も洛中囀のひとり
祇園会と聞くだに熱くなる思ひ
祇園会や出番来し山大路へと
祇園会や一生懸命山担ぐ
祇園会や銚より山に親しみて
祇園会の松はるばると若狭より
祇園会や清めの雨の荒々と
祇園会やうすがき着たるたもとほり
祇園会や神々ここに群がり来
祇園会も最後の銚の過ぎし音
祇園会はその明け方の豪雨かな
祇園会の人を吐きだす電車かな
祇園会は少年の日の祭かな
祇園会や真松の空晴れわたり

飛岡光枝
佐々木まき
木下洋子
同
本橋康子
中村汀
川村玲子
伊藤昭子
田宮尚樹
諏訪いほり
澤田美那子
東一爽
梅田恵美子
近藤沙羅
山田寿美子
木下洋子
伊藤昭子
長谷川權

【祇園祭】

朝刊は祇園祭のことばかり
大雨の祇園祭となりけり
とにかくに祇園祭の暑さかな
神も人も行きかふ祇園祭かな
こんぺいと祇園祭の京都より

【銚祭】

三ヶ月を抜きし手拭ひ銚祭
袴の腰の櫛や銚祭
灯されて駒形ちやうちん銚祭
屋根方は所在なさげや銚祭
天熱し地も又熱し銚祭
銚祭晴れたることを言ひ合へる
海山の神やすらかに銚祭
銚祭先ぶれのごと燕とぶ
見たがりの子規にみせばや銚祭
越の人相模の人や銚祭
鴨川のおばれてをるや銚祭
兵児帯に結ぶ櫛や銚祭
この国の厄払はばや銚祭
打ち水のみる間に乾き銚祭
真つ青な竹切り出して銚祭
汗みづくなるがうれしき銚祭
小夜ふけて名残りの笛や銚祭

福林幸代
同
中野津久夫
佐々木まき
同
山田寿美子
同
近藤沙羅
同
岩根壽美
角野京子
山田蜚草
酒井きよみ
北側松太
飛岡光枝
安藤久美

中買の声のきおへる體祭
骨切のこつにぎやかに體祭

【銚立】銚建

銚立の固めの槌の響きけり
ゆさゆさと幣を揺らして銚立てり
〇も幣をゆはへて銚立つる
銚建や真木は大路塞ぎたる
銚建や切られて開く縄の先
つぎつぎと銚立ちあがる夏の月
みしみしと音たてて銚立ちあがる
ゆさゆさと櫛を揺らし銚立てり
ゆさゆさと櫛とひら銚立てり
高きより櫛ひとひら銚立てり
銚立や新縄のよき香りして
銚建ての巻くや結ぶや二本縄
銚建やまだ濡れてゐる櫛の葉
青空に塩撒いて銚立てにけり
銚立の縄の切れはし貫ひけり
きしみつつ長刀銚は建ち上がり
銚建や真白き御幣散らしつつ
銚立つや涼しき風のまた来たる

飴山實
同
長谷川浩子
太田芳男
横山幸子
植田房子
同
同
近藤沙羅
同
本橋康子
同
同
木下洋子
同
山田寿美子
同
小川もも子